

高齢者介護サービス事業施設別におけるレクリエーションに対する関心について
— レク・セミナー参加者アンケートの結果から —

○ 廣田 治久（余暇問題研究所） 山崎律子（〃） 上野 幸（〃）

キーワード： 高齢者介護、レクリエーション・セミナー

1. はじめに

高齢者介護福祉とレクリエーションに関する問題は、近年本学会をはじめ他の学会においても注目されており、多くの研究発表がなされている。山崎、上野、廣田らもデイサービスや特別養護老人ホームの現場事例を基に研究を行なった(レジャー・レク研究 39号 1998、51号 2003年)。その中でレクリエーションに対する正しい理解やプログラムに対するマンネリ化を危惧している実態や指導・支援のための技術の向上や教育の必要性を述べている。

介護福祉に関するレクリエーションの教育プログラムとしては、とくに日本レクリエーション協会が公認する福祉レクリエーション・ワーカーや各介護福祉資格取得のためのカリキュラムとして行なわれている。しかし、このような公認の資格としてではなく「レクリエーション」をキーワードに民間組織として研究者らがセミナーを主催してきた。このセミナーに多数の参加者が集まっている背景には、レクリエーションに対する介護福祉施設の関心が潜在的に高いことを示すのではないかと考える。また、参加者により良い内容のセミナーを開催し、高齢者介護福祉施設におけるレクリエーションの啓蒙を進めていくためには高齢者介護施設のレクリエーションに対する関心の実態を把握することが重要と考える。

2. 目的

本研究は実践研究として、高齢者介護サービス事業施設別のレクリエーションに対する関心の実態を把握する。あわせて民間有料セミナー参加者のアンケートに見られるセミナーへの参加動機やセミナーへの感想を分析することを目的とした。

3. 研究方法

- ・ 対象：A社が主催する有料の「レクリエーション・セミナー」の参加者
- ・ 方法：セミナー終了時に実施された参加者アンケートをもとにその参加者所属施設、参加動機を集計。また、アンケートに書かれた感想をまとめる
- ・ 期間：2005年8月から2006年5月
- ・ セミナー実施回数：調査対象期間中全27回
- ・ 参加者総数 1601名
- ・ 実施都市：青森(1)、仙台(1)、高崎(2)、千葉(1)、埼玉(2)、東京都内(1)、府中(1)、横浜(1)、静岡(2)、名古屋(3)、大阪(2)、京都(2)、神戸(2)、岡山(1)、広島(1)、金沢(1)、福岡(1)、北九州(1)、沖縄(1)
※ () 数は、1会場における実施回数
- ・ アンケート回収数：1523
- ・ A社セミナーの主な内容：「レクリエーションの正しい理解」「プログラムの立案方法」「具体的支援方法」

4. 結果

表1 事業施設別参加数割合

施設名	通所系 施設	グループ ホーム	介護老人 保健施設	特別養護 老人ホーム	有料老人 ホーム	その他
%	51.13	7.65	14.10	11.70	3.39	12.03

表2 参加動機

参加動機	本人の意思で	上司に勧められて	その他
%	47.21	47.67	5.12

<アンケートの感想>

- ・レクリエーションの基本的な考え方を学び、知識が広げることができた。
- ・介護現場を経験した上での具体的な説明や支援方法がわかりやすかった
- ・「大人の幼稚園」と言われて心が痛んでいたが救われた気がした。
- ・職場が変わりレクを担当することになり、何をどのように行なったらわからなかったがヒントを得られた。
- ・車椅子や身体麻痺、認知症利用者への対応を学ぶことが出来た。
- ・可能ならば定期的に職員を受講させたい。

5. 考察

- ・事業施設別参加数では、デイサービスに代表される通所系施設が全体の半数を占めており、これらの施設での関心が最も高いことが明らかとなった。
- ・通所系施設に比べグループホームや特別養護老人ホームなどの参加数の少ない理由は、認知症や麻痺などの高齢者に対して「レクリエーション活動は難しい」といった先入観が背景にあるのではないかと考える。
- ・レクリエーション・セミナーへの参加の動機は、「本人の意思」、「上司の勧め」が約半分以上を占めている。これは管理者側にレクリエーションに対する関心が高いものと推察される。
- ・参加者はレクリエーションに関する継続的な教育機会への参加意欲は高いと考えられる。
- ・レクリエーションの基本的な考え方、介護の現場や要介護高齢者を熟知した支援方法を学ぶことは、本人の自信を高め、今後のレクリエーション支援への意欲を高めることにもつながっている。
- ・認知症や麻痺、車椅子など多様な利用者に対するプログラムやそれらを一同に支援する現場を持つことへの課題を感じている現状にある。

6. まとめ

今回得られた知見から、研究者らの先行研究と同様な結果となった。すなわち、レクリエーションへの正しい理解を促すこと。またそれらを理解した上で、認知症や身体能力の低下のある高齢者へのレクリエーション活動支援にも、支援の基本や技術を高めていくことが高齢者介護福祉のレクリエーションにより必要であると考えられる。

これらのことを踏まえて、今後もより良いセミナーの実施に努力していきたい。